

## 和歌の読み方―源氏物語を読むために

日本学術振興会特別研究員 早稲田大大学院文学研究科博士後期課程 御手洗靖大

### 一、和歌を解釈するための手順

- ①五／七／五／七／七に句切る。
- ②句切れに「。」をつける。
- ③句ごとに訳す。
- ④句をまたいで頭から解釈する。
- ⑤表現技法（枕詞や序詞など）を考える。

（例）

大空 天の原仰ぎふりさけみれば春日なる

みかさの山に出でし月かも

※作者は奈良の人。中国から日本に帰る時の送別の宴会で詠まれた。

### ●文法が難しい…？

和歌にとって**助動詞**は一、二文字で気持ちを伝えてくれるとっても便利な言葉です。

- き … 今と時間的に繋がらない前のことを表す（過去）。
- けり… 言い伝えやお話をする時や、今と繋がりのある前のことを表したり（過去）、昔からあった物事に今気づいた時（詠嘆）に用いる。
- つ … 動作が生じたことを表す。特に、事がらが完成した時に用いる（完了）。
- ぬ … 動作が生じたことを表す。特に、事がらが起きた時に用いる（完了）。
- たり／り… 動作が目の前で起こっている、続いていることを表す（完了／存続）。
- む … これから起こるだろうと思う時や、存在を仮定する時に用いる。
- べし… ある事柄が疑う余地無く起きると強く思う時に用いる。
- る／らる… 動詞について、自分の意志とは関係なく起きる動作であることを表す。

### 【例文コーナー】

①玉の男皇子さへうまれ給ひぬ。（源氏物語 桐壺）

②若紫「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠の内に籠めたりつるものを」（源氏物語 若紫）

③限りなう心を尽くし聞ゆる人にいとよう似奉れるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。  
（源氏物語 若紫）

④（光源氏は）かたがた移ろふ心地して、涙落ちぬべし。（源氏物語 紅葉賀）

●ご一緒に解釈してみましよう！

春の野に若菜摘まむと来しものを散りかふ花に道は惑ひぬ（古今集・春下・一一六・紀貫之）

さくら花散りぬる風の名残には水なき空に浪ぞ立ちける（古今集・春下・八九・紀貫之）

【和歌解釈のヒント】田中康二「縁語」渡部泰明編『和歌のルール』笠間書院二〇一四年

一般に和歌は初句から順に読みはじめ、結句（和歌の第五句のこと）に至って全面的に趣旨が明らかになるものです。だから、初句を見た時にはまだ全貌が見えません。しかし、先がある程度予想して読みを修正しながら読み進めていきます。そうして最後までたどり着いた時、初めて全体像が見えるわけです。（八一頁）

## 二、声に出して和歌の表現技法を味わう

●序詞…メッセージ部分のために尽くされる言葉の部分。聞き手を共感させる。

〔あしひきの山鳥の尾のしだり尾の〕長々し夜を独りかも寝む

（拾遺集・恋三・七七八・人麻呂）

〔駿河なる宇津の山べの〕現にも夢にも人に逢はぬなりけり（伊勢物語・九段）

※駿河の宇津の山辺で詠まれた和歌。歌の読み手・聞き手もこの土地が分かる。

●枕詞…ある特定のワードを聞き手に想起させる五文字の言葉。

あしひきの 〓 山	あかねさす 〓 紫・日・光
ちはやふる 〓 神	あづさゆみ 〓 張る・いる
ひさかたの 〓 光・天	あをによし 〓 奈良
ぬばたまの 〓 黒・夜	くさまくら 〓 旅
からころも 〓 着る・裁つ・袖	しろたへの 〓 衣

●縁語…和歌の表面上の世界観を作り上げるために連想的に紡がれる一連の言葉。

（例）

○衣―着る―裁つ―裾―褻（着物の襟先から下のへりの部分）―萎る―張る

○波―立つ―寄す―返す―余波

○糸（緒）―絶ゆ―弱る（弛む）

●縁語の和歌

玉の緒よ絶えなば絶えね永らへば忍ぶることの弱りもぞする

(新古今集・恋一・一〇三四・式子内親王)

●伊勢物語 九段 東下り

※◇は御手洗が追加。

むかし、男ありけり。その男、〈自分の〉身を要無きものに思ひなして、「京にはあらし、東の方に住むべき国求めに」とて〈旅に〉行きけり。もとより友とする人、一人、二人して行きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河の国、八橋といふ所に至りぬ。(略)その沢のほとりの木のかげに下りゐて、乾飯かれいひ食ひけり。その沢に杜若かきつばたいと趣おもしろく咲きたり。それを見て、〈友達の〉ある人のいはく、「か、き、つ、ば、たといふ五文字を句の上に据ゑて、旅の心を詠め」と言ひければ、詠める。

からころも着つつな萎れにし褻しあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、乾飯かれいひの上に涙落としてほとふやけてとびにけり。

☆からころも(枕詞)↓着物の和歌が詠まれるという予想↓着・萎れ・褻・張る・着

↓でもどこが「旅の心」なの？

からころも着つつ萎れなにし褻

張る張る着ぬる

着物の歌



妻しあれば

遙々来ぬる旅をしぞ思ふ

旅の心

☆縁語が和歌の世界観を守り、メッセージを隠す。||和歌リテラシーが無いと伝わらない。

友達はこの歌をきいて号泣||和歌の分かる心の友と旅をしている。

●本歌取り：聞き手や読者の知っている歌（本歌）の一部を取り入れ、分かち合う技法。  
本歌取りの和歌を口伝で味わってみましょう。

（名所月歌合・五番・右・源家長・一〇 新勅撰集・雑歌四・一二七七）

本歌は

もう一首！

（新古今集・秋下・四八七・藤原定家）

本歌は

### 三、平安時代の人々にとって和歌とはどのようなものか

小兵衛といふ（女房）が赤紐の解けたるを、「誰かこれ結ばばや」と言へば、実  
方の中將寄りてつくろふに、（二人は）ただならず（雰囲気で、実方はこんな歌を詠んだ）。

あしひきの山井の水はこほれるをいかなるひもの解くるなるらむ

と言ひかく。（でも小兵衛は）年若き人の、（さらに）さる顕証のほどなれば言ひにくき  
にや、（歌の）返しもせず。その傍らなる人共も、ただうち過ぐしつともかくも言  
はぬを、宮司などは耳とどめて（彼女の返歌を）聞きけるに、久しうなりげなる  
かたはらいたさに、異方より入りて（他の）女房のもとに寄りて、「などかうはおは  
するぞ」などぞささめくなる。

（枕草子 八六段 「宮の五節」）

☆恋愛の場面で、当時の男女は日常的に和歌を詠み交わしていた。

#### 四、源氏物語から 葵より 六条御息所の苦しみ

源氏は正妻である葵の上とうまくいかない結婚生活を送っていたが、葵の上の妊娠で関係が良好となっていた。葵祭の前日、つわりの慰めとして行列を見物していた葵の上だったが、従者が六条御息所の従者とトラブルを起こしてしまふ。結果的に六条御息所が屈辱を味わうこととなってしまった。その後、六条御息所が思い病んでいることを知った源氏は見舞いに訪れる。

〈御息所は〉かかる御もの思ひの乱れに、御心地なほ例ならずのみ思さるれば、他に渡りたまひて御修法などせさせたまふ。大将殿光源氏はこのことを聞き給ひて、「いかなる御心地にか」と愛ほしう、思し起重い腰をあげてこして御息所の所へ渡り給へり。(略) 源氏自身は葵祭の一件に従者に心より他なる怠り無礼がちななど、罪許されぬべく御息所に聞こえ続けたまひて、へ一方で、悩み給ふ人の御ありさまも憂へ聞え給ひ。

〈源氏は〉「私おおげせに自らは身重の妻のことなどさしも思ひ入れ侍らねど、へ妻の親たちの、いとこごとおおげせにしう思ひ惑はるるが心苦しさに、へ妊娠の身重のかかるほどをへ妻の面倒をへ見へて過ぐさむとてなむ。へどうか様よろづへ我が家の事情を思しのとめたる御心へを貴女様がお持ちくださるならば、いと嬉しうなむ」など御息所に語らひ聞こえ給ふ。常よりも心苦しげなるへ御息所の御気色を、ことわりに哀れに見奉り給ふ。

〈その後、二人がへうちとけぬ朝ぼらけに出で給ふへ源氏の御様の、をかしきにも、なほ源氏のことへふり離れなむへと思ふことは、へかえつて思し返さる。

へ葵の上というやむごとなき方に、へ源氏がいと心ざし愛情を添ひ給ふべきことも出で来にたれば、へ源氏の愛の対象が、葵の上というひとつ方に思し鎮まり給ひなむを、へ私はかやうにへ源氏の訪れを待ちきこえつつこの世にあらむも、へ苦しい心のみ尽きぬべきこと、へと思ひ悩んでへ源氏の訪問がなかなかも思ひの驚かさるる心地したまふに、へ源氏からの御文ばかりぞ暮れつかたある。

「日ごろ少し怠る様なりつるへ妻の心地の、俄にいたう苦しげに侍るを、え引き避無視してかてなむ」

とあるを、「例のことつけ」と見給ふものからへ源氏の文を無視できないで、

「袖ぬるるこひぢ(恋路／小泥)とかつは知りながら降りたつ田子奥女のみづからぞ憂き

愛情の浅き  
よく分かりませわ  
山の井の水もことわりに」

とぞへ御息所の返事にはへある。「へ御息所の手紙のへ御手手は、なほこころ多らの人の中に優れたりかし、」とへ源氏はへ見給ひつつ、「いかにぞやへかともある世思かな、へ御息所はへ心も容貌もとりどりに、捨つべくもなく、またへだからといって生涯をこの人などとはへ思ひ定むべきも無きを苦しう」へ源氏はへ思さる。へ源氏からのへ御返り、いと暗うなりにたれど、

「へ貴女の歌のへ袖のみ濡るる」やいかに。へ私への思いはへ深からぬ御ことになむ。

浅みにや人貴女はおりたつ我が方は身もそほ全部浸かるつまで深きこひぢを

並大抵のことて  
おぼろけにてや、この御返りをへ遅い手紙ではなくへみづ直接から聞こえさせぬへよほど  
妻が重体なのですへ」などあり。

### ●御息所の歌

袖ぬるるこひぢとかつは知りながら降りたつ農夫田子のみづからぞ憂き

### ●源氏の歌

浅みにや人はおりたつ我が方は身もそほ濡れるつまで深きこひぢを

☆相手の言葉(こひぢ::恋路/小泥)を使って歌を作る⇒相手を受け入れる体。  
しかし、内容は相手のメッセージを正面から受け取らない。

### ●山の井の水もことわりに

悔しくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみ濡るる山の井の水(古今和歌六帖・第二・九八七)  
無念にも水をすくい始めてしまった。浅いので袖だけが濡れる(飲めない)山の湧き水よ。

↓山の井の水⇒浅くて袖が濡れるもの⇒愛情が浅くて泣かされる

### ☆古歌のフレーズを文章中に織り込む

⇒和歌を知っている源氏物語の読者は古歌を思い出して、内容を理解する。  
文章で本歌取りが起きている。

※『源氏物語』の引用は日本文学web図書館「平安文学ライブラリー」に、和歌の引用は同「和歌連歌俳諧ライブラリー」により、私意により改めた。なお、本講演は科学研究費補助金(特別研究員奨励費 課題番号 22111254)による成果の一部である。